

園だより

12月号



令和3年11月30日
新宿区立西戸山幼稚園
園長 佐藤 淳穂



砂のおもしろさに出会う

園長 佐藤 淳穂

4歳児の5人組が砂場の縁に付いている砂をカリカリとそぎ落としていました。砂場用の小さなシャベルで固まった白い砂を砕き、バケツに集めています。5人の会話を聞いてみることにしました。

「Aくんの足を埋める遊び、楽しかったな」「へへ」「今度はBくんの足を埋めようかな」「へへ。ほら白砂集まったよ、ほら」足を埋めてもらったAくんはそう言いながら集めた白砂をCくんのバケツに入れました。

子どもは、何かを埋めたり掘ったりすることが大好きです。目の前にあるものが見えなくなることが魔法のように不思議に思えるのです。自分で埋めたのに、見えなくなると本当にそこにあるのかドキドキする…。足が見えなくなって、ぜったいあると思いつつも「やっぱりあった」とほっとする。友達の足を心配する気持ちを5人で共有して5人がつながる…そんなひとときだったのではないのでしょうか。

そして、次に「カリカリと硬い砂を削る遊び」が始まったのでした。コンクリートのように固いののに削るとサラサラの砂になるからこれも不思議です。砂場にはあふれるほどに砂がありますが、自分で削り出した白砂は特別です。砂場の縁にこびりついていた硬い砂は、一周まるごとすっかりきれいになってしまいました。

片付けの時間になった時、5人は大事な白砂の入った4つのバケツを保育室前に運びました。しかし、一人が「こんなに並べたら先生に怒られる」と言ったことから、5人はバケツをとっておくための誰にも見つからない場所を求めて園庭を歩き回るようになりました。怒られるかどうかはわかりませんが、結局、Cくんの「一つにまとめればいいじゃん」の提案で、白砂は一つのバケツに集められ砂場奥のプランターの後ろに隠されました。

岩石や鉱物の研究者も石を砕いたり、成り立ちをよく見たり、こんな地道な作業をしながら石や砂の魅力にはまっているのかもしれない。白砂削りのおもしろさは一瞬で5人に広がりました。「おもしろい」を共に感じ合える友達の存在が楽しさを一層膨らませます。砂の特性に気付くと同時に、無限にあるかもしれない砂の遊びをつくり出し、友達とのかかわりも学んでいます。ロバート・フルガムの「人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」にもうなずけます。

園庭での遊びを終えた子どもたちはお面を付けて動物や虫、忍者や姫に変身します。こども会の本番を間近に控えているのです。一人一人のいろいろな発想がはじける劇づくりのプロセスは社会性、協同性、創造性、想像力…子どもの成長をグンと助ける要素の宝庫です。私もお話の世界を覗きに行ってきます…。